艦隊雑記・ろくでなし

Jasさん（Jasmine）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自他共に認める戦闘狂の足柄は、平和な毎日に鬱屈していた。伸び悩む撃沈数。飛んでくるのは鋼の鳥から海鳥に変わり、堕落した生活を送る艦娘達。彼女達に未来はあるのか。

目次

第一話 …… 1
第二話 …… 9
第三話 …… 16
第四話 …… 24

第一話

「はぁ…」

自室で今月の戦果諸元を眺めながら、足柄は悩んでいた。思うように稼げない撃沈数。原因は単純明快であった。

「どうしてこんなに平和なのかしら…」

重巡寮の窓は何故かどれも西を向いている。夕焼けなんてロマンチックなものは見えない。ただ眩しいだけだった。

沿岸の制海権はわが方にある。少し前まではこの薄暗くなる時間帯を狙って空襲に来る軽空母が、良い標的になっていた。

だが、敵も増え続ける損害に見合わぬ戦果と見切りをつけたのか、いつの間にか、この時間帯にくるのはジュラルミンの鳥でなく、普通の鳥になっていた。

足柄は目を細めて外を見る。

童謡のようにカラスが飛んでいた。

実に、実に平和である。

「何かこう、刺激的な戦闘がしたいわ…はぁ」

ため息ばかり吐くなと、昨日那智に叱りを受けたばかりだが、足柄のため息の数は日に日に増していくばかりであった。

平和なのはいいことだ。先日も、安全漁業海域が増えたと聞いた。

輸送船が護衛無しで航行できる安全な航路の確保も、日に日に進んでいる。

「…那智、今日も付き合ってくれるかしら…」

だが、足柄のような戦闘狂にとって、それは死活問題だった。

※

夜。賑わいを見せる鳳翔の居酒屋。

そのカウンター席の一角で、そこだけ妙に酒の匂いが鈍く、妙にテンションの低い二人が居た。

足柄と那智だった。別に合コンに失敗したわけでは無いのだが、座敷席で派手に酒盛りをする泥酔した朝までちゃんぽんズの方々には、

酒の席のネタにしかなっていなかった。
「那智ぃ、アンタもかい?・そこの狼さんに男どものところへ連れまわされてお疲れかい?アッハハハ!」
顔を真っ赤にして大酒食らう、優雅な客船の面影はどこにいったのか。
「こいつがいつから結婚できないアラサーになったんだ…それより飲み過ぎだぞ隼鷹、明日は嚮導艦隊の大規模演習がだな…」
「つれないですよぉ~ナチさ~ん、ほらほら飲みましょ飲みましょアシガラさんもほら、おほ~えへへぇ」
他人に進めておきながら、もう浴びる勢いで酒瓶を空にするＰｏｌａにツッコミを入れたい那智だったが、それよりも足柄が心配だった。
なんだかんだ言いつつも、姉妹であり、戦友であり。
戦場で共に死線を潜り抜けた仲間同士、どうにも無下に出来ないものがあった。
「戦いたい戦いたい!・兵器の本分っつったら戦闘でしょーが!」
「足柄…お前、演習先の駆逐艦になんて呼ばれてるか知ってるか?」
那智は半ば呆れ気味だったが、冷静さを保っていた。
彼女は滅多な事でベロベロにはならない人間だった。
酒との付き合いは長く、そして密だった。彼女は律し方を心得ていた。
カウンターには2人の開けた空の酒瓶が既に5本置いてあったが、那智は頬こそ紅潮しているが、彼女の基準では、まだ素面だ。
「みんな!・イヨ特製おにぎり食べる!?・食べよう!?」
外観に似付かぬ酒豪っぷりを今晩も申し分無く発揮しているのは、潜水空母伊１４。Ｐｏｌａといい、姉がいないと手が付けられなくなる艦娘の筆頭だ。
手には彼女自ら握った、蛍光グリーンのおにぎりがあった。「光おにぎり」というらしい。
最早、何も語るまい。
皆、やりたい放題である。ここまで混沌とした酒盛りが繰り広げら

れるようになったのも最近の事だ。
戦闘回数の減少は、艦娘の意識の琴線を緩めていった。
それに、艦娘が足りなくなる事態もまず発生しなくなったので、朝まで飲もうがお構いなしなのである。
「食える色素だといいな」
隅の席で、マメアジの唐揚げ肴に芋焼酎を開ける日向が呟く。
「そういう問題じゃないでしょ…日向」
ちびちび御猪口をかたむける伊勢は、ここで数少ない常識人だった。

※

「全く…あのアル重（バカ）と一気飲み勝負だと？馬鹿にも程があるぞっ、ほら肩を貸すからしっかりしろ！」
「うーん…ああーっ…Ｏｏｐｓ」

※

「ああ…お腹痛い」
執務室の防空加工済み窓から鎮守府上空を旋回する単葉の三座水偵を眺める瓶底眼鏡に無精髭を蓄え、側から見れば軍人というより技術畑出身に見えるであろう男、ここの提督。
彼は引き攣った笑みを浮かべながら、時計を確認する。
時刻は１０時丁度を指していた。
となるとあの三座水偵は演習相手の艦隊から発進した機であり、それが示すのは約束の時間の訪れだ。
「くたびれた装備に、くたびれた艦娘か…」
ぼやきをかき消すように、重々しい扉の開閉音が執務室に響いた。
伊勢が連絡に来たのだった。
「提督、演習相手の艦隊、もう間もなく着くって…って提督!?」
伊勢が見たのは、あの微妙な表情を一切崩さず、ただ腹を抑え床でうずくまる弱々しい提督の姿だった。
「…伊勢…編成は昨日決めた通りで…」

「あれ？提督？」
「どうした伊勢…って何があった。白目剥いてるぞ。」
「日向っ！提督が！」
提督の胃潰瘍は、今日も悪化の一途を辿っていく。
至極当然だった。
演習相手は誰が決めたか、どこかのお偉い提督が直々派遣した響導艦隊。
練度はハッキリ言って「異常」である上、お偉い方々の視察というオマケ付きなボリューミーすぎるメニューである。
手も足も出ずにやられたとなれば、練度不足と判断されるに違いないし、その責任がどこに飛ぶかと言ったら、艦隊指揮の最重要責任者でもある提督である。
だが、事はそれ以上の問題を抱えていた。足柄である。戦闘狂が戦場を掻き乱す。
そのうちに演習弾は鎮守府施設に飛び火し、訪れるのは地獄。
だから足柄は編成にいない。今朝那智から「足柄は今日はまともに動けんだろう」という話を聞き安堵した提督だったが、もしも再起動したら。
その時もう彼の胃は潰瘍どころでは無くなってしまうだろう。彼に出来る事は、「願掛け」として艦隊に編成した雪風に祈る事しか無かった。
※
「皆サーン！ヨロシクオネガイシマース！」
陽気な挨拶により幕を開けた「演習」。港湾に集結した二つの艦隊。物々しい艤装を身に纏った艦娘たちは、互いに出撃前の最終確認を行っていた。
砲火を交える相手艦隊の先頭で、似非外国人的な風貌を醸し出しているのは他でもない、高速戦艦・金剛だった。
彼女は響導艦隊の旗艦であり、「お偉い提督」の虎の子の戦力といわれるだけはある。
陽気に見えるその風貌とは裏腹に、その目はこれっぽっちも笑って

いなかった。
対峙する日向はそれをいち早く見抜いていた。
「…お手柔らかに頼む。こちとら寄せ集めもいいとこだ」
表情一つ崩さぬまま、金剛の「兵器」としての冷たい瞳を見つめながら、そう言った。
日向の艤装の飛行甲板には、晴嵐のように主翼が折りたたまれ、操縦席部分が遠隔操作ユニットに交換された「瑞ファンネル」こと、明石渾身のびっくりドッキリメカ、「瑞雲３２型」が大量に搭載されていた。
彼女の瑞雲に注ぐ情熱。整列し羽を休める瑞雲には、ネタと一言で片付けるのは些か早計かと思うほど、さながら今にも飛び立たんと猛り立つ荒鷲のような気迫があった。
「親睦を深めるのが一番デス！気負わないで楽しくやりましょ！」
と、金剛。
「ああ。では」
日向は振り返り、自艦隊を眺めた。
自分、伊勢、那智、雪風。それから、伊１３。
空母がいない。連中は酒で全滅していた。
この状況では良い采配と言えよう。あの提督も、人を見るのは下手ではない。
が、勝つのは無理だろう。
どれだけ長く保たせられるか。そういうことになろう。
『@#$）…!!』
突如、インカムに雑音が飛び込んできた。
「日向だ。艦隊の帯域で入ってるぞ。誰だ、どうした？」
『…#$%…胃散、胃散っと…あぁマジの元帥殿の艦隊だ…ううっ！』
提督だった。
「…落ち着け。無線入ってるぞ」
『あら？…あーっ、すまん…』
「ほら、貴様はあと少しで下がれるだろ？シャキッとしろ…」
※

そんな提督とはうって変わって、にこやかに、しかし堂々と立つ元帥提督。
その雰囲気は、金剛と同じだった。
そこにいるのは優しいおっちゃんなどでは無い。軍人だった。
今この一瞬にも、相手を見極めんと光る彼の双眸は、鋭いナイフのような気迫があった。彼は何か無電すると、観戦用のテントへと入っていった。
そんな様子を呆けて眺めていた提督に、雪風から無電が入る。
『しれえ、勝ったら間宮券を頂けるんですよね？』
「そりゃそうさ。ばら撒いたって良い。勝てればだけど…」
『んー…はい！勝てますよ！きっと勝てます！』
「そりゃ良い！雪風の予感はよく当たるからなあ」
口ではそう言っておいても、相手の艦は普段から鬼のような鍛錬を積んだ金剛型４隻に加え、噴式戦爆の運用が可能な装甲空母、翔鶴型改二甲を引き連れている。
対してこちらの戦力は伊勢型２隻に那智、そして雪風の４隻に加え、足りない航空戦力を少しでも補強するために、伊１３までもが配置されている。
伊１３には、明石が昨晩徹夜で完成させた「切札」とやらを搭載したようだが、それが何なのかを知る明石は未だに起きて来ず、あろうことか装備を託した彼女にさえ伝えられていない有様だった。
「あー、みんな、ちょっと聞いてくれ。…別にな、勝たなくても良いんだ。ただ…」
「ただ…」
その瞬間、提督の胃は限界を迎えた。
出来の悪いだるま、起き上がることな引き攣った笑みを浮かべたまま、痛みに耐えきれず脂汗を浮かべながらぶっ倒れた提督。これで指揮系統も潰れた。
※
「さて…ズイコミュは久しぶりだ。上手く扱えるかな。」

ズイコミュこと、ズイウン・コミュニケーター。日向にのみ搭載された謎システム。
遊園地一つを瑞雲色に染め上げたり、瑞雲のプラモをメーカーに再販させたり。
機能と呼べるかさえ謎の機能が盛りだくさんなのだ。
「あんまり無茶しないでね？日向が倒れちゃ困るどころじゃないんだから。」
「いや待て色々初耳なのだが。そもそも提督が倒れてしまっては私達の指揮はどうなるんだ？」
「（那智、聞こえるか？）」
「脳内に直接…!?」
「これもズイコミュの機能の一つだ。さらには自動でファンネルを発進、戦闘まで行ってくれる。指揮は私が執ろう。」
問題はあらかた解決した。してしまった。艦娘達は海へ出る。妖精音楽隊が、盛大に軍艦マーチを奏でていた。

※

「うぅ…頭痛い…もう朝か…」
昨日は散々だった。酔った勢いでＰｏｌａと一気飲み対決をした足柄は、空き瓶の数が１ダースに達する頃には茹でダコのように赤くなっていた。
ろくに足も回らず、夜中には結局吐いた。当然二日酔いが回ってこない筈もなく、今日も散々な１日になりそうである。
日光に目を細めつつ、寝ぼけ眼を覚まそうと顔でも洗いに行こうと思い立った足柄は、布団を蹴り上げ起き上がったが、ふと机の上の卓上カレンダーの今日の日付に、誰が貼ったか赤いシールがある事に気づいた。
「今日ってなんかあったかしら…」
まだまともに働かない脳をフル稼働させ、思い出そうとした足柄。
すると、ふと、那智の一言がフラッシュバックした。
『こいつがいつから結婚できないアラサーになったんだ…それより飲

み過ぎだぞ…明日は響導艦隊の大規模演習がだな…』

響導艦隊の、大規模演習。

「あああああーッ！そうだわ…！演習…すっかり忘れてた…！こんな事なら昨日あんなに飲まなかったのに！」

頭痛も忘れ、噴進砲弾のような勢いで朝の支度を済ませた足柄は、重巡寮を後にした。

「はぁっ、はぁっ、くっ…早く…戦場に…！」

出撃の為、艤装の置かれている乾ドックへ進路をとる。正午近くの日光は、恨めしいほど燦々と降り注いでいた。

「各艦所定位置に到着した模様…だってさ」

無線機をしまいつつ、カタパルトを確認する伊勢を制止し、那智は自身の水偵を取り出した。

「私が水偵を出す。対艦攻撃可能な艦載機は出来る限り温存だ」

そう言うと、那智はカタパルトに零式水偵を乗せ、コクピットの妖精と目配せする。エンジンが始動した。

合成風力、微妙な艦の傾斜…タイミングを合わせ、3、2、1。

ポン、という音と共に、火薬筒に点火。緩やかに燃焼する炸薬のエネルギーが滑車へと伝わる。

ワイヤが水偵を牽引する。急激に速度を増していく水偵。

台車から機体が離れると、妖精は自身の首が折れていない事を確認し、快適な哨戒飛行が始まった。

「…始まるな」

第二話

「む…帰って来たか」
それは那智一番機。
距離が距離なので、流石にまだ点にしか見えないが、確かに彼女の水偵だった。
「お互い、手足が付いていると揚収作業が手早く済む。こればかりは本当に有難いな」
と、日向。
本来、水上機の揚収というのは非常に手間のかかる作業であり、「艦の大作戦」といっても過言ではない。
着水地点が荒れていれば、機は転覆するかもしれない。艦の操艦による航跡で海をなだめさせてやる必要があった。
それだけならまだしも、艦上のデリックで機を吊り上げる作業は困難を極める。
これが手でヒョイと回収するだけで済むのは、艦載水上機運用の一種のブレイクスルーだった。
その為、本来成し得なかった「阿賀野型への瑞雲の搭載」のような事例が発生している。決して日向師匠の瑞雲布教活動の結果ではない筈である。
はずであってほしい。

「でも気になりますね、敵が3隻しかいないのは。」
雪風が双眼鏡を覗きながら呟いた。
それは、先刻水偵から送られてきた電報によるものだった。
発見された艦は3隻。いずれも艦影から金剛型と判断されたが、これが実に不可解であった。こちらに水爆があるのが分かっているのなら、空を確保する為には空母が必要不可欠。別行動が作戦だったとしても、空母を一隻も付けずに当たりに来るとは考え難い。
「ねぇ日向、三式弾の演習弾って…」
「ペイント弾子。中身は機銃弾と同じだ」

伊勢は相手がこちらの艦載機を対空砲撃で潰す事を警戒していた。三式弾が演習にて脅威となるのは周知の事実だった。
効果の薄い焼夷弾子であっても、当たれば撃墜判定を喰らうペイント弾に変わるだけで、それは花火どころではなく、三式弾が予見していたであろう性能――――即ち、正真正銘の対空秘密兵器と化す。
「撃ってくるのかなぁ…さぁてどうしようか、日向」
相手の手の内を読む事は勝利への最短ルートを築く事。だが、今は時間が無い。双方とも、主砲の射程圏内まで残り僅かとなっている。もう間も無くすれば、穏やかなこの海も戦場と化す。砲弾飛び交う地獄の一丁目の完全再現だ。
「やるしかないだろう?…ズイコミュ起動。」
日向は腹を括った。この状況をチャンスと取る。
制空権を確実に取れるならば、最大限活用する他に無い、という事だ。
…まあ、そうなる。
「さてと…行けっ!ズィン・ファンネル!」
ズィン・ファンネルこと放熱板ではなく、瑞雲３２型。
手間のかかるカタパルトを使用せず、耐熱処理の施された甲板から大型のＲＡＴＯを用いて垂直発進を行う、という仕組みである。
離床した瑞雲は空中で翼を広げ、始動した発動機が空気を震わせる。
ＲＡＴＯは十数秒燃焼し、内部圧の低下により推力を喪失する。
そうすれば次は水平方向の加速が必要になる。
機体の落下が始まる刹那、両主翼下に吊るされたＲＡＴＯに火がついた。失速寸前の機体は機首を保ったまま、速度を得ていく。

日向は達観したような表情で、その光景を眺めていた。
「どうして離陸出来るんだ…」
この光景は見慣れた物だったが、いつ見ても「どうかしてる」、と思わざるを得ない那智だった。
これでようやく戦いの火蓋は切り落とされた。全艦は最大戦速で

一路、敵艦隊へと舵を取る。が、日向には一つやっておく事があった。ズイコミュの「交信機能」は、水中だろうが御構い無しに機能する。
「(伊１３。聞こえているか？)」
「…日向さん？私の頭の中に…どうやって。」
潜行しつつ待機していた伊１３。日向は彼女に残る３艦を捜索させる事にした。
こちらが動いたのを相手が知れば、無論それは未確認の３艦にも伝わる。
警戒はより強まり、偵察機は逆に撃墜される可能性が高い。だから対潜装備の無い艦である事を逆手に取り、伊１３を向かわせる事にしたのだ。
「(全く、明石もよくやる。伊１３、残る３艦の捜索を頼む。ＫＭＸ(磁気探)未装備の機体は対潜能力を持たん。聴音器は積んでるだろうが、攻撃手段は無いぞ。静音航行の必要は無い。少し驚かせてやれ。思いきり走るんだ)」
「了解…です。」
これで準備は整った。普段は気まぐれな猫のような電探も、今日は確かに敵艦３隻の所在を表示していた。
電探射撃。旧大戦で散々蟻酸を舐めさせられたこの戦法。だが、今ならば出来る。
敗北に敗北を重ねた今だからこそ出来る。日向は伊勢に目配せすると、主砲の旋回を始める。
「方位、仰角よし…」
２隻の大戦艦の据える３基６門の３８ｃｍ砲は天を仰ぐ。
「一斉射ッ！」
刹那、１２門の砲は光芒と共に周囲の空気を爆発的に揺るがした。
先行する瑞雲ファンネルは、光学航法用に装備されたカメラを用いることで、簡易的ながらも弾着観測機の役目を持つ。
打ち出された軽量「演習」弾は、通常の徹甲弾よりも大きな弧を描き、まるで意思を持つかのように仮想敵艦へと一直線に飛翔し、海面へ飛び込んだ。水柱が次々と上がっていくのが見えた。

「ほう…夾叉か。上出来だな。」
ズイコミュによるタイムラグの発生しない情報伝達により、弾着結果はすぐに分かった。我らが大戦艦二隻は、初弾にして夾叉をやってのけたのだった。
「…頼もしいな。よし、私達が肉薄する。後方支援は任せた！」
「雪風、行きますっ！」
水雷兵装を持つ那智と雪風は、敵の懐に飛び込み、強力な酸素魚雷を叩き込みに掛かる。上空の瑞雲ファンネル隊は、彼女達にとっては実に心強い存在となった。だが、敵も黙っている訳がない。砲の閃光は昼間の強い日差しにかき消されてこそいるが、敵艦隊もまた砲撃を始めたのが分かった。
「この距離でっ！」
しかし、初めは大幅にブレていた砲撃も、次第に至近弾が増え、海が荒れる。それでも2隻は突貫する。肉眼で仮想敵艦3隻の姿がはっきりしてくる頃には、魚雷発射管のスタンバイも終了していた。
「あと…少しですっ！」
無誘導の魚雷の命中率を上げるには、距離を詰める以外に方法はない。
そのため、雷撃戦は駆逐隊単位での一斉射を行うのが基本だが、「そんなものはない」。
たった二隻の水雷戦隊は、進む以外に取るべき進路はなかったのだ。彼女たちの中には確信があった。
先の初弾夾叉を、ＳＦ作品のような瑞雲隊の発艦を受け、いつしか確信は一種の幻想に変わる。
――だがその幻想は、己の慢心だということには、まだ気付いていない。
「直撃させる！」
強大な高速戦艦3隻を前に、怯むことなく果敢に挑みかかった那智と雪風。

だが、そんな彼女達を嘲笑するかのように、目の前に佇む「強大な」金剛が放った幾度目かの一斉射撃の弾道は、那智を確実に捉えていた……

「避けきれない」――那智は一瞬の間に結論を出した。爆発音。那智の視界は爆炎と閃光に呑まれていく。

だが、何かが違った。直撃した「16inch」砲弾の熱量は、演習用のそれをはるかに上回っていた。

破壊され周囲に飛散する艤装の部品。爆煙が晴れ、那智がみたもの、それは「金剛ではなかった」。

「熾っている…ッ!?」

金剛の瞳からは、青白い光が漏れ出していた。それは艦娘の物ではない。ニィと口元を歪ませ、膝を付いた那智をあざ笑うかのように見つめるその瞳は。

「深海…棲艦…!」

※

「はぁ…はぁ…やっと着いたわ…明石、いるかしら?」

ようやくたどり着いた出撃ドック。艦娘の艤装もここに集積しており、出撃の為の諸作業はここで行うのが常だった。

中には艤装の部品が乱雑に散らばり、壁際にはちょっとした作業机があり。

その上に、小さなCRTが置かれていた。

「行った行った!この新しい瑞雲の性能っ!どうです、見ましたか!瑞雲はまだまだ使えるぞぉ!アハアハハハハ!勝てるぞぉ我が艦隊!アハハハハ!ヒャハッハァ!アハハハハハ!瑞雲バンザーイ!」

一方の明石は酸素欠乏症にかかっていた。

階段がなかったのが唯一の救いである。

おかしなテンションのままよろよろと立ち上がった明石は、足元の小さなリベットに足を取られ、盛大に転んだ。

後頭部を強打したことで、深夜テンションのまま演習を観戦してい

た明石は、ようやく正気に戻った。
「…」
「…」
「コーヒー、いる？」
「あ、お願いしまーす…」
　缶コーヒーを２本抱えて戻ってきた足柄は、さっそく本題に入った。
「今から出撃するわ」
「ダメです」
　即答だった。だが当然のことである。演習の最中に突然艦艇が増えただなんて洒落にならない大問題である。
　何より相手は元帥提督の艦隊であるし、お偉いさん方も勢揃い。当然無礼は禁物であった。
「…」
「…」
「あ、瑞雲出てきたわよ」
「えっ！どこですか⁉」
　飢狼は一瞬の隙も逃さない。明石の気をそらした僅かな時間のうちに、自身の艤装の元に駆け寄った。艤装のコネクタを、背中に貼り付ける。続いて魚雷発射管を装備しようとした時だった。
「ああーっ！な、那智さんっ⁉」
　明石がとんでもない声を上げた。足柄もこれには驚いた。那智の名が出てきたからだ。
「ちょっと⁉どうしたの！」
　装備途中の艤装を放り出し、足柄はモニタを覗き込んだ。
「なんで…実弾？演習じゃ…ないの？」
　ＣＲＴに映し出されていたのは、金剛の主砲の直撃を受け、大破した那智の姿だった。演習弾でこうはなる筈がない。
「どういう事よ…奴ら、一体何を…」
　その時だった。サイレンが突如、甲高い音を上げた。空襲警報。演習中に鳴るなど、前例のない事態だった。

「双眼鏡ッ！借りるわよ！」
足柄は、床に落ちていた双眼鏡を拾い上げると、外へ急いだ。
ピントを合わせ空を凝視すると、黒い物体が幾つか見えた。点は次第に大きくなり、数十秒でその目的が分かった。
魚雷が懸架されていなかったからだ。
「どうです!?何か判りましたか!?」
「流星艦攻…アレは敵艦隊の機…かしら？」
明石は足柄からひったくるようにして双眼鏡を奪い取ると、黒い物体に指向した。そこで明石は思わず息を呑んだ。
「プロペラが回っていないのに…飛んでる…!?」
その「おかしな艦攻」を見るのにもう双眼鏡は必要なかった。５機で編隊を組み飛来するそれらは、形こそ流星のそれだが、その機首のプロペラは回転していない。
エンジン音が聞こえて来ても良い頃合いなのに、一切の音がしない。なのに飛んでいる。よく見ると、機体後方から青白い光を発している。それらの特徴は、深海棲艦の艦載機に酷似していた。
「…迎撃装置が起動しない？」
明石は悟った。鎮守府の防空警報は、探知した航空機の挙動をいくつかのゲートで処理し、それがインシデントと判断された時に鳴るように作られている。
これに敵味方の区別は無い。
だが、高角砲は違った。
識別信号が味方の物ならば、自動迎撃システムも起動しない。
あの航空機は味方の識別信号を偽ることで、やすやすと鎮守府施設への接近を成功させたのだと。
「不味いッ！」
二人の上空を通過した５機の不明艦攻は、しっかりと土産を落としていった。
「畜生ッ！どーなってるのよーっ！」
二人は、ドックごと盛大に吹き飛ばされた。
空中からは、もうもうと煙に包まれる鎮守府が見えた。

第三話

「ってて…あ、明石、生きてるわよね…？」
が、その明石は、瓦礫に上半身が突っ込み、陸上版スケキヨと化していた。
「艦娘が簡単に沈むか！と言いたいところですが…無理です、助けて下さい～」
足柄はあられもない事になっている明石の下半身に同情しつつ、両足をしっかり持つと、思い切り引っこ抜いた。
「あだだだ…しかし派手にやられましたねぇ…」
まず目に付いたのは、赤煉瓦の倉庫。見るも無残な姿になっていた。周囲を見渡せば、爆撃の惨状が次々と明らかになっていった。
出撃ドックは瓦礫の山と化し、足柄が缶コーヒーを買った自販機も、原形をとどめない程に破壊されていた。
「さて…こうなっちゃどうしようも…」
「出るわ。これは敵襲よ。演習相手が深海棲艦？最高に面白いじゃないっ！」
足柄は戦闘狂。が、彼女にも矜持はあった。だから屈辱だった。
ここまでみすみすとやられていくのを見ているだけなのが。屈辱だった。
自らの鎮守府が、自らの目の前で破壊された事が。
彼女は闘争を求める。故に曲がった戦争は大嫌いであった。
卑劣な手段に対しても、人一倍敏感であった。
「でも艤装は…！」
「…耐爆塗料塗布済みでしょうが！あんなんでくたばる程、私の半身はヤワじゃないわ！」
足柄は瓦礫の山と化した出撃ドックから、自分の艤装を掘り出し装備した。
所々に傷はあるが、全てが完璧に動作する。
明石はそんな足柄の姿を見て、揺るがされていた。
彼女もまた、この鎮守府を愛していた。自分は工作艦。直接戦闘に

は関われない。だからこそ、自分の出来る事で役に立とう。そう肝に命じていた。
「足柄さん、５分下さい。”とっておき”を用意しますから。」
普段見せる事の無い、明石の「本気の目」に、足柄は大きく頷いた。
明石はボロボロの赤レンガ倉庫に消えた。それから数分も経たぬうち、明石は再び姿を見せた。背には人間の身長にも匹敵する大きさの、巨大な白い筒を背負っていた。
「それ…何？」
「ＶＯＢですよ、ヴァンガードオーバードブースト」
局地強襲用に用いられる艦娘用の推進器（すっとぼけ）、ＶＯＢ。
構造上非常に脆い上、一度爆発すれば飛散した特殊燃料が深刻な環境汚染を引き起こすので、近年では使用が禁止され、このＶＯＢも本来は廃棄予定だったものだ。
明石は足柄の艤装に花弁状のＶＯＢマウントを取り付けたところで、ふと何か思い立ったようで、また倉庫へ向かった。
今度は一分もしない内に出てきた彼女は、「三十八サンチ」と書かれた巨大な弾薬箱を二つ担いでいた。
「これを伊勢日向さんにお願いします。ＶＯＢのキャパシティならば…巡航速度は落ちますが誤差の範囲です。」
ＶＯＢに、浮力材と共にピアノ線で半ば強引に取り付けられた弾薬箱。
ＶＯＢは小さな動翼しか持たない筒。
空力的に大丈夫なのかと心配になる見た目だが、そもそもそれ自体が莫大な推力で艦娘を強引に飛翔させる物なので、何ら問題は無いはずだった。
キメラは足柄の背部に装備され、弾薬箱がどことなく肩ミサイルにも見えなくもない、そんな見た目だった。
これにはアブ・マーシュもニッコリ。
だが、足柄に巡行形態へのロマン変形機能は無い。が、それが無くとも、ＶＯＢは十分以上の速度を与える。
「よし。足柄、出撃よ！」

足柄はニッコリと笑い、親指を立てた。直後、４基のメインエンジンが点火した。足柄＋αの質量をいとも簡単に重力に逆らわせる事の出来る、力強い光。
轟音と共に足柄は重力の井戸に逆らっていく。強烈な加速Ｇが彼女を襲う。
「くっ…中…々…きつ…い…わ…ね…」
ぶれる姿勢を、艤装のＣＰＵが強引にジンバル操作で封じ込める。ピトーが無いので速度は判らないが、とんでもないスピードで飛翔している事は確かだった。
落ち着いて「Ｄａｎｇｅｒ　Ｚｏｎｅ」も聞けやしない。このままでは間違いなく戦闘海域を通過してしまうが、下方を確認している余裕は無い。というか出来ない。
一か八か、スラスタの燃焼を強制停止させ降下する案も浮かんだ。だが、戦闘海域から大きく外れる事は、さして効果の無い演習弾で必死に抵抗するこちらの艦隊が危険に晒される時間が増える事を意味する。運を天に任せるか。意を決し、エンジンカットを指令しようとした瞬間だった。
「(足柄か!?明石の奴目…ＶＯＢを使ったな)」
「ひ…ゆう…が…!?」
脳裏に響く日向の肉声。幻聴ではない。
「(減速しろ！座標を送る！)」
「無茶…言って…っ！」
が、日向からのデータを受信した足柄の艤装は、装備者の意思もお構いなしに推力ジンバルが最大稼働し、Ｚ軸まわりで１８０度反転した。
後ろ向き飛行、である。
機尾を進行方向に向けた…のである。
「うわあああっ！死ぬ！潰れる！いやあああああっ！」
推力のリミッターは解除され、脾臓破裂・肋骨損壊レベルのＧと共にみるみるうちに減っていく速度。
「止まっ…」

空中で静止した刹那、足柄は重力の井戸に捕まった。
「たあああああっ!?」
足柄は背面を下に向け、一直線に落下する。重いＶＯＢを装備していては碌に動く事も出来ない。
「ちょ!?外れないの、これっ!?――外れろぉぉぉ！」
その叫びに呼応するように、固定金具が吹き飛ぶ。
外れた。
艤装に音声認識機能を付けたのは誰だろうか。
ＶＯＢはバラバラに分解し、足柄と共に落下する。
エアブレーキも昇降舵も、そもそも推力源を持たない足柄は、手足をばたつかせる以外に空中で出来る事はない。
海面はみるみるうちに迫り、数秒後には盛大に水柱が立った。
「…生きてるか？」
日向が見たのは、上半身が海に突っ込み、スケキヨと化した足柄の姿だった。
「…」
「…待っていろ、今助ける」
あられもない事になっている足柄の下半身に同情しつつ、日向は彼女を思い切り引っこ抜いた。
「
「…白目を剥いている。ダメか。」
気絶しているようだった。流石にフラットスピンを決めながら華麗に着水、そのままガン＝カタという風にはいかない。
ふと、日向は前方に沈みかけているＶＯＢの残骸を見つけた。
浮力材の括り付けられた弾薬箱が浮いている。
その光景は、足柄が実弾を運んできたのだ、とすぐに理解できた。
「…よくやった。」
「ハッ!?私、生きてるわよね!?」
足柄は血相を変え、頬を３度叩く。再起動を果たせた様子だった。
「艦娘が簡単に沈むか、だろう？」
弾薬箱を取りに行く日向。その背中には、計り知れぬ頼もしさが

あった。
「…お前が来たという事は、何かあったのだろう？」
「やられた。連中はハナからこれが狙いだったんだわ。奴らは深海棲艦。鎮守府は壊滅よ。」
「おーい日向…って、足柄？どうしてここに」
　伊勢が飛行甲板に瑞雲を戻しつつ現れた。揚収作業を済ませて来た様子だった。
「…実弾。そういう事だ」
「そうだ…戦力、戦力は！」
　那智と雪風の姿は見えない。彼女たちが轟沈した、なんて報は知りたくはなかった。
「那智は雪風ちゃんと離脱してる所…私達もなんとか振り切ったけど…」
「よく振り切れたわね…連中、高速戦艦でしょ？」
「外観はそれでも中身は、という事だ。ル級か何かだろうな。まあ、ひとまずはこれで安心だ。戦艦２隻、重巡１隻。ル級３隻を叩く分には、さして問題は無い。」
「だけど航空戦力が心配ね…ＶＴ信管を使ってくるなんて…」
「航空戦力…そうだっ！空母よ！那智と雪風は！」
　空母は２隻とも健在。そして、あの時鎮守府に飛来した流星もどきはたったの５機。待機機は未だ大量に残っている筈であり、あの５機も装備換装が済めば再び戦場へと舞い戻る。
　その時だった。
『日…さ…！…ん…！…機が…那…さ……智さんっ！』
　ノイズまみれの無線が飛び込む。それは間違いなく雪風のものだった。
「雪風ちゃん!?」
　しかし、今から向かったところで間に合う筈も無い。追い討ちをかけるように、水平線の向こうには三つの艦影が見えていた。
「不味い…」
　足柄の握り拳に、力がこもる。状況は最悪だった…

※

「那智さん！もう少しですっ！」

大破した那智を先導する雪風。度々双眼鏡を覗いては、必死に敵機の所在を確認していた。

「くっ…主機への浸水がっ…！」

那智は、ギリギリだった。浸水は機関室の一部まで及び、速力も満足に出ない状況だった。

この状態では回避運動もままならず、一度空襲を受ければ、その結果は想像に難く無い。

だが、戦神は更なる悲惨さを求める。雪風は、2時の方向より飛来する「何か」を視認した。

「まさか…っ！」

雪風は咄嗟に無線機を起動した。だが、伊勢日向の瑞雲が健在とは限らないし、仮にこちらに回してくれたとしても、到達には時間を要する。今は1分1秒でも惜しいし、その1分1秒が死へと直結する地獄の一丁目でもあった。

「日向さん！伊勢さん！敵機が！」

「ッ…!?がっ！」

その時、那智が爆発を起こした。損傷した缶に浸水し、水蒸気爆発を起こしたのだった。

「那智さんっ！那智さん！」

悲痛な叫びが、那智に一つの結論を出させた。

自らは雪風の足枷となる。雪風を危険に晒す事になる。

ならば――――

「っ…雪風…行けっ！私に構うな！進むんだ！」

「那智…さん？」

死神と揶揄された雪風。数々の艦の最期を見届けてきた雪風。彼女の持つ双眼鏡は、見る事しか出来なかった彼女の、戒めのような物だった。だからこそ。

「駄目です！誰も沈ませません！雪風はっ！雪風はぁっ！」

堪え切れなくなった雪風は、大粒の涙をこぼした。
だが、「もう死神なんかじゃない」、その言葉が発せられることはついに無かった。
それは自身がこの姿を得た時から決めていた事。言葉にする必要なんて初めから無かったのだ。
絶対、大丈夫なのだと。雪風は沈まないし、誰も沈ませはしないのだと。分かりきった事だった。
「…護ってみせます!」
涙をぬぐい、空を睨む。敵影はかなり大きくなっていた。雪風は機種判別の為、再び双眼鏡を手にした。
編隊の先頭を翔ける機の姿は、両主翼にエンジンナセルを懸架した独特のフォルム。
それは間違いなく「橘花」のそれだった。
だが、本来より暗い緑色の迷彩を纏い、エンジン音の一つも響かせないまま飛行するその姿は、深海艦載機そのものだった。
「あれは水平爆撃しか出来ない機体…!なら、こうしますっ!」
雪風は那智の手をしっかり掴むと、出せる限りの出力を絞り出した。
「雪風…」
橘花隊はぐんぐん迫る。機首が下がっているのが見え、緩降下爆撃をするつもりだと雪風は判断した。
「当たるかぁっ!」
橘花もどき隊が次々に爆弾を投下する。雪風たちの大きく手前で投下された爆弾達。
当たるはずが無いと思っていた。
だが、爆弾の一つが雪風の手前に着弾すると、爆発することなく、「海面を跳躍した」。
「反跳…!?」
咄嗟に舵を切るも、躱しきれない。
その瞬間、雪風には1秒が、まるで1時間のように感じられた。全てがスローモーションに見えた。

「あつい……！」
雪風の艤装各部のダクトが、規定値を超えた排熱を行う。それは、ダクトを赤熱させるのに十分なほどだった。
何かが熾る。
雪風の身体に灯った炎は、彼女の何かを焼き尽くそうとしていた。
その刹那、爆弾は雪風を目前にして空中で炸裂した。
爆風が彼女の身体を揺らすが、損傷は無し。幸運にも信管の設定が甘かった様子だった。
「今のは…」
空には、第2波の攻撃隊が雪風たちを睨んでいる。
戦いは続く。

第四話

空中には未だ、再びの攻撃チャンスを狙う敵艦載機がいた。
状況は先程と何も変わっていない。だが、毎回幸運の女神が微笑んでくれるとも限らない。
「ところでなんだが…」
那智は雪風に問う。
「どうしました？」
「あの艦載機、撃墜しなくては鎮守府に危険が及んでしまう。」
既に鎮守府は滅茶苦茶だが、主要な施設はまだ一部が残っている。
完全に機能を奪い、この鎮守府を機能停止に追い込むのであれば、それらを破壊してしまうのは、奴らにとって得策と言える。
何より、あれらには敵となる海鷲も存在しない。
好き放題爆弾を投げ込めるのだ。やらない理由など、弾薬・燃料費をケチる程度の事しかない。
「隼鷹さん、千歳さんは出撃できないんですか？」
「無理だろうな…きっとまだ寝てる。…三式弾も、中身は塗料の模擬弾だからな。」
「雪風の対空砲撃も、お役には立てませんね…」
塗料を塗りつけ、視界を奪えるキャノピィも無い。
こちらの武装は漬けていないの桶の上に載った漬物石同然。無用の長物である。
「だが…おかしいな。それは奴らも分かっている筈。何故私達だけを付け狙う…？」
「うーん…那智さん、私達の艦載機は高角砲に反応って…」
「…しないな。識別信号が出ているはずだ」
「だったら！もう鎮守府に攻撃が回っている…!?」
「ッ…十分にあり得る話だ…」
話に合点が付いた、その時だった。
突如、上空を旋回する敵機が、一気にダイブを始めた。まるでこの瞬間を待ちわびていたかのような素振りでだった。

「急降下爆撃っ!?」
『似せているのは外見と識別信号のみ』それがあの艦載機の本質であり、外観が橘花であっても、まるで頑強な艦爆でも扱うかのような機動で降下をする。
みるみる迫る敵機は、手始めに手負いの艦にとどめを刺すべく、爆撃照準を那智に合わせた。
彼女もまた、それにはすぐに気づいた。だが、回避運動を取れる余裕も無い。
再び雪風が手を伸ばした瞬間、敵機の腹から黒い塊が投下される。
第一波が着弾。数個の爆弾は、那智の艦体から僅か数メートルのところで炸裂。
大きく振り回される那智。その瞬間、水柱と共に発生した大波は、彼女に思わぬ打撃を与えた。
「速力が出にゃあぐっ!?…し、舌を…」
口の中に生じた血液の風味に不快感を感じつつも、そんな余裕があるのか、と言わんばかりに第二波攻撃の嵐が訪れようとしている。
「那智さんっ!」
雪風が那智に駆け寄る。
だが、曳航しての速力が、急降下爆撃の精密な照準を確実に躱すのには不十分過ぎるという事は、先程の交戦でよく分かっていた。
だがこれ以上何が出来るだろうか。反撃する手立てはない。避けきれる保証など無い。
それでも、これしか出来る事は無い。雪風は那智の手を強く握る。その手は、哀しいほどに震えていた。
「さあ、『雪風』を護るんですよ」
突如、二隻の脳裏に声が響いた。どこか懐かしさを感じる、聞きなれた声。
「…『』さん?」
雪風はつぶやく。誰に向けて?
爆弾が炸裂してもいないのに、水面が膨れ上がった。
それどころか、固体ロケット燃焼時特有の爆炎が上がっている。

その煙の主は、すぐに姿を見せた。ノーズコーンの無いロケットのような、尾部にノズルを持つ筒が二つ、海面を脱し、みるみる上昇していく。

ある程度登ったところで、筒は花弁の開くように展開し、それに呼応するように、推力1．5ﾄﾝを生み出す高温ヴァルター機関から噴き出す高温の燃焼ガスが、エンジンの「主」を持ち上げる。

「何が…起きたんだ…？」

〔秋水三尺露を払う。姫君は、ナイトが先導（つゆはらい）してあげなくては。〕

折りたたまれた翼が開き、その面積いっぱいに風を受ける。

高温高圧の燃焼ガスにより生み出されるパワーは、機首がほぼ垂直にある今この状況でも、しっかりと支えるどころか、機体の高度を上げつつあった。

「これは…秋水？」

聞いたことがある。那智は記憶を辿っていた。

あれはレイテの半年前だっただろうか。第４次遣独潜水艦作戦。新型戦闘機の技術供与。

一方は橘花だったか。もう一方は高空で大推力を得る為、燃料と共に酸化剤を積み燃焼させるロケットエンジンを心臓とする迎撃機。

わが海軍の「彗星」艦爆と同じ名前を冠すその機体。

資料が潜水艦と共に海の藻屑となった後も、帰還した技術者の僅かな資料を基に、その機体は最後の剣となるべくして完成を見た。

その名は「秋水」 研ぎ澄まされた剣（つるぎ）。

だが、その日本らしい名前を知ったのは、私がこの姿になってからの事だった。

〔名付けて、『秋水（シュウスイ・ザ・セカンド）Ⅱ』ってことで。奥の手ですよ、奥の手。〕

秋水Ⅱは放物線の頂点、推力偏向とエレボン操舵で強引に機首を下げ、失速寸前の状態から推力のみで加速しつつ、敵機を正面に捉えると、両翼付け根に設置されたレーザー機銃を放つ。

光速で進むレーザーは、敵機に避ける暇も与えない。

瞬時に炎上、バラバラになり墜落していく敵機の姿を、二隻の艦娘はただただ眺めることしか出来なかった。

秋水は自身が撃墜した機体に目もくれず、ただひたすらに次の敵を、また次の敵をと狙いを定める。
圧倒的な火力、旋回力。機体剛性が心配になるようなその圧巻の空戦機動は、特殊な耐G処置の施された妖精といえど成し得る物ではない。
キャノピは無く、妖精の代わりに載っていたのは、「機械」だった。
「凄い…！敵が次々…」
空はたった2機の局地戦闘機により瞬く間に制された。
秋水Ⅱは高度を下げると、旋回を始めた。まるで主を待ちわびる忠犬の様に、推力を絞り低速で旋回を続けている。
「那智さん！ソナーに感ありですっ！」
そんな光景を呆然と眺めていた矢先、突如雪風が叫ぶ。
「…敵ではない。」
水面から、伊号潜水艦特有の潜舵をもつ艦首が顔を出している。
「感謝する…伊13。」
メインタンク、ブロウ。瞬く間に全身が水上に出る。
すると、秋水はそちらに向かって飛行を始めた。
「すみません、遅くなってしまって…間に合って良かった。その…空母を見つけてしまって…つい。」
「ちょっと待て、空母をどうしたんだ…？」
「沈め…ました」
伊13は満面の笑みを浮かべる。
「ちょっと待て！実弾…持って行ったのか…？」
「それは…明石さんが…」
昨晩、工廠にて。四徹の明石は狂喜していた。
「うひょひょひょひょ！出来ましたよ！出来ましたよ潜水艦搭載型秋水！さあ、うちには潜水空母が2隻もいますからね！きっと大喜びでしょう！ポチっておいたヒドラジンもここにっ！」
作業机に無造作に置かれた「艦娘装備シリーズ　局地戦闘機秋水」と描かれた箱の中には、解体済みランナーが突っ込まれている。明石はその机の引き出しから容器を取り出し、強く握りしめる。

続いてエプロンから、不穏なマークが覗く円筒を出す。
「さらにっ！今回は響さんが里帰りした時にもらってきたシクヴァル（核弾頭搭載済み）もありますよ！お客さん、ここで装備していくかい？」
「それは素晴らしい！」
「イヨちゃん…」

※

「海が！」
「汚れますっ！」

戦いは、まだ終わらない…